浄土經典における「蓮華化生」について

肖 越

問題の所在 『大阿弥陀經』(以下『大阿』)において「(蓮華)化生」という用語は 16 回(「化生」と関連性を持つと考えられる用例を含めば 21 回)ほど使用されている。筆者の以前の論文では、「化生」と関連する『大阿』の第 2 願の「女人往生」に関して検討したが(Xiao 2014)、「化生」についての問題は、『大阿』の成立論にも深いかわりがあるので、更に検討すべきである。本論では、『大阿』における「化生」の用例を分析し、「化生」という用語の「初期無量寿經」から「後期無量寿經」への変遷を考察する。

1. 『大阿』の特殊な用語群 筆者はこれまでの研究において、〈無量寿經〉諸本の成立は、『大阿』の二十四願から『平等覺經』(以下『平等』)の二十四願へ、そして「後期無量寿經」の四十八願系へ発展してきたこと、また〈悲華經〉諸本の阿弥陀仏願文は、〈無量寿經〉の願文を受けたものであるという学界の二つの定説が成立しないことを明らかにし、改めて「初期無量寿經」を読み直すべきという立場に立っている。『大阿』の特殊な用語群の使い方を精査することによって、『大阿』の漢訳者による中国的な変容の意図を確認することが本論の目的である。これらの特殊な用語は 20 種類以上あるが、本論と直接に関わりがあるものは、「作善」「作惡」「齋戒清淨」「智慧 ⇄ 愚痴」「作菩薩道 ⇄ 菩薩阿羅漢無數」「為道」「愛欲 = 淫佚」などである(用語群の特徴は Xiao, forthcoming a, b)。今までの研究では、個別の用語について検討がなされてきた。しかし如何なる用語を精査する際にも、ほかのすべての用語との関連性をも同時に検討すべきである。

2. 願文に関連する「化生」

2.1. 第 2 願の「化生」 『大阿』の第 2 願は 5 つの願事(「国無女人」「女人往生」「転女成男」「蓮華化生」「菩薩阿羅漢無數」)を説いている。この第 2 願の「化生」の配列と〈悲華經〉の願文の配列とはよく一致する。また、『大阿』以降の〈無量寿經〉諸本には、「国無女人」「化生」に対応する願文が存在しないことから、『大

阿』の願文と〈悲華經〉の願文とが関連性を持つことは間違いない。『大阿』における第2願の「化生」は、「後期無量寿經」の原語（*aupapāduka or upapāduka*）と同じであるが、それぞれの成立が異なる。「後期無量寿經」のものは、〈無量寿經〉の原典から訳され「胎生」と対の概念として使用されている（藤田 2007, pp. 418–422）。2經の願文の関係については、① 形式から見ても、内容から見ても、〈悲華經〉の阿弥陀仏願文は、現存の〈無量寿經〉諸本の何らかの影響を受けたとは説明できない、② この問題に注目し改善しようとして、石上氏は「中期無量寿經」が存在したであろうという仮説を導入した（石上 2013）。しかしその仮説によって、問題が簡略になるわけではなく、更に複雑になった。なぜならば、もともと説明できなかった（ア）『大阿』と『平等』2經の願文の関係、（イ）〈悲華經〉の阿弥陀仏願文と〈無量寿經〉諸本の願文との関係という2つの問題が残ったままにもかかわらず、更に少なくとも次の4つの問題が増えたからである。（i）「中期無量寿經」の形が全く分からないこと。（ii）「中期無量寿經」と『平等』との関係。（iii）「中期無量寿經」の願文と『大阿』の願文との関係。（iv）「中期無量寿經」と「後期無量寿經」との関係。しかも、「中期無量寿經」という仮説は、哲学の「単純な説明が常に真実である」と主張するオッカムの剃刀原理に反する（葉少勇氏の教示に感謝の意を表す）。したがって、〈悲華經〉諸本の阿弥陀仏願文は、〈無量寿經〉の願文を受けたものであるという学界の定説が成立する根拠が存在しない。また、『大阿』の21回の「化生」の用例のすべてが經典の前半にあることと合わせて、『大阿』の第2願の「化生」は、〈無量寿經〉系統と異なる系統から挿入されてきたのであると考えられる。即ち、『大阿』の第2願の「化生」は、『大阿』の原典から翻訳されたものではなく、漢訳者により〈悲華經〉にみられる願文を参考にして付加されたものであると筆者は考えている（Xiao 2014）。誤解されないよう、ここで強調したいことは、仮に〈悲華經〉の成立は『大阿』より遅れても、必ずしも〈悲華經〉の願文は遅れない。例えば、668年に編纂された『法苑珠林』に『大阿』の願文が引用されている（T53, p. 552a23–b17）ことで説明できる。即ち、『法苑珠林』の阿弥陀仏の願文は、『無量寿經』（421年に翻訳、藤田 2007, pp. 76–87）の願文より古いというのが正しい。

2.2. 二つの特殊な表現 『大阿』の第2願の「菩薩阿羅漢都無央数」「七宝水池蓮華中化生長大」という2つの表現からこの観点を更に明らかにする。まず、「菩薩阿羅漢無数」については、『大阿』の第20願に説いているにもかかわらず、更に「女人往生」を説く第2願にも「菩薩阿羅漢無数」を付加することは非常に不

(46) 浄土經典における「蓮華化生」について（肖）

自然である。次に、漢訳者より意図的に修訂されたと考えられる『大阿』の法蔵菩薩段の「作菩薩道」の表現とよく一致する（Xiao 2015 を参照）。更に、生因願の第 7 願にも「作菩薩道，奉行六波羅蜜經」という表現がみられる。以上の三点とも、梵本に対応する箇所が存在していない。従って、『大阿』の第 2 願は原典から忠実に翻訳されたものではなく、漢訳者により修訂されたものであると判断している。

2.3. 成就文における「化生」 第 2 願の「化生」の表現は、第 2 願の成就文から『大阿』の漢訳者がこの第 2 願の「化生」を付加した意図を知ることができる。その成就文は、「其國中悉諸菩薩，阿羅漢，無有婦女，……女人往生，即化作男子。但有諸菩薩，阿羅漢無央數……」（T12, p. 303c8-9, cf. T12, p. 283a19-20）とある。この続き、極樂の菩薩阿羅漢の有様を説く文（諸菩薩，阿羅漢，皆才猛黠慧……皆相敬愛，無相嫉憎者，以義如礼，轉相敬事如兄，如弟。以仁履義，不妄動作言語。如誠轉相教，令不相違戾，轉相承受；皆心淨潔，無所貪慕，終無瞋怒，淫泆之心，愚痴之態。無有邪心念婦人意，悉皆智慧勇猛，T12, p. 303c14-24, cf. T12, p. 283a26-b8）がある。次の 3 点を注意すべきである。①「無有婦女」「無有邪心念婦人意」などより愛欲を断じることを強調する意図が明確に読み出せる。この特徴は、(i) 第 7 願および三輩段の「捨妻子断愛欲」「不当与女人交通。斎戒清淨」「断愛欲念」，また (ii) 「五惡段」にも強調されている文（中有不良之人……常念淫泆煩滿胸中，愛欲交錯坐起不安……眈眈細色惡態淫泆，T12, p. 314b8-11）と完全に一致する。② 以上の成就文は、梵本に対応する箇所が存在せず、「後期無量寿經」のほかの諸本にもない。特に、中国儒教の根本思想である「仁・義・礼・智・信」をもって極樂の菩薩阿羅漢たちの特性を表していることから、以上の文は、原典から翻訳されたものだと考え難い。③ 豊かな表現で（「自然去」⇔「化去」，「即化作男子」cf. 第 2 願に「即作男子」）「化生」を表している。従って、第 2 願の「化生」は、〈無量寿經〉系統の原文より翻訳されたものであるとは考え難い。第 2 願の前半の「無有婦人」と対の概念として同時に『大阿』の漢訳者により、意図的に付加されたものだと考えている。

3. 上輩往生段における「化生」 『大阿』の第 5-7 願は、それぞれ下・中・上輩往生を説く。それに対して、ほかの諸本には上輩往生の誓願文のみ存在する（大田 2005, pp. 54-55 を参照）。また、第 5-7 願には、「化生」の表現が使用されていないものの、それらの成就文（下，中，上輩段）に「化生」の表現が使用されている。『大阿』の第 5-7 願の成立は、別稿に詳細に論考した（Xiao, forthcoming b）が、結論としては、次のようになる。① 第 7 願の原初形態は、現存の梵本の第 18 願とほぼ同じようなものである。筆者の研究によると、第 7 願には「沙門」と「諸

天人民」という二つの主語があって、その出家者の主語と後の「善男子、善女人」は『大阿』の原典に存在せず、「作菩薩道」の六波羅蜜の「戒を持つこと」を強調するため、漢訳者が意図的に付加したものである。②『大阿』第6願は平川氏の主張される「印度の初期大乘仏教の仏塔信仰を表す」（平川 1969, pp. 778-788）ものではなく、完全に漢訳者により付加されたものであると筆者は考えている。即ち、『大阿』の原典には、第6願のようなものは存在しない。③『大阿』の第5願の原初形態は、現存梵本の第19願（また、『無量寿経』の第20願）とほぼ同じもので、前世に悪業をなした人々に現世に菩薩道の作善をさせるため大幅に改訂されたものである。同じように第7願に対応する上輩往生段（T12, pp. 309c26-310a14）には、少なくとも特殊用語が13種ある。そのなか「去家捨妻子」「断愛欲」「経戒」（2回）「不当瞋怒」「不当与女人交通」「斎戒清浄」の7つの表現は六波羅蜜の戒に関わりがあり、また「無為之道」「六波羅蜜」「作菩薩道」の3つの表現は『大阿』の全体に強調されている「作菩薩道」に関わりがある。それらの表現は、梵本に対応する箇所がすべて存在しない。また中国で成立した「五惡段」に頻繁に使用されている。それらの用語を含む文を削除してみると、『大阿』の上輩段の内容は、現存の梵本に対応する箇所とほぼ同じになる。更に、この上輩段に含む表現（便於七宝水池蓮華中化生、即自然受身長大）は、第2願の表現（皆於七宝水池蓮華中化生長大）とよく一致する。従って、この箇所の「化生」と関連する文は、第2願の「化生」と同じように漢訳者が意図的に加えたものである。

4. 「後期無量寿経」の「化生」 「後期無量寿経」の「胎化段」は經典の後半にあって、その表現は『大阿』の中・下輩段の次の文にみられる「化生」の表現によく似ている。佐々木氏はこの問題に注目し、初期大乘經典の変遷として「後期無量寿経」の「胎化段」は經典の後半へ移動されたと指摘した（佐々木 2003）。ただし、再度検討する必要がある。① この段落は、「疑」だけを説いているのではなく、「施与」「斎戒」などの作善の内容も説いている。また、「疑」の内容は「後期無量寿経」の内容と異なる。そして、「作善」「悔過」の用語は中輩往生を説く第6願に存在せず、下輩往生の第5願に使用されている。ところが、『大阿』の第5願の「前世為惡」「悔過」などの表現は、梵本の第19願には対応する用語が存在しない。② 中・下輩段の次の段落に繰り返し説かれている「即於七宝水池蓮華中化生、則受身自然長大」（T12, p. 310b9-10, p. 310c26-27）の表現は、第2願の表現とよく一致する。従って、この段落の「化生」は、第2願の「化生」と同様に經典の翻訳者が意図的に強調しようとした内容の一つである。『大阿』の原典は、

(48) 浄土經典における「蓮華化生」について (肖)

後期經典の「化生」と類似の表現があった可能性が高い。

結論 まず、『大阿』の第2願にみられる「化生」は、『大阿』の原典から翻訳されたものではなく、第2願に説く「無有女人」と同時に編入されたものである。漢訳者が「無有女人」と「蓮華化生」を強調しようとした意図は、六波羅蜜（作菩薩道）の戒の重要性を強調することである。この意図は、『大阿』の誓願文だけではなく、「五惡段」を含む『大阿』の全体に溢れている。中・下輩段の次の「化生」に関する文は、「五惡段」を編入することにより大幅に修訂されたものである。『大阿』の原典における「化生」の内容は、おそらく現存の梵本の内容と位置とともに同じであったが、現存の「化生」の内容は『大阿』の第2願にみられる「化生」に基づき修訂され、現在の位置に挿入されたものであると考えている。『無量寿經』の翻訳者は、「五惡段」を修訂するとともに、「化生」の内容をもう一度翻訳し經典の最後に復原した。纏めれば、『大阿』は漢訳者により「善」と「惡」に基づき大幅に修訂されたものである（肖 forthcoming c）。本論の考察により、異なる側面から〈悲華經〉にみられる「国無女人」「化生」の誓願は、『大阿』の影響を受けたのではないことがわかる。

〈参考文献〉

- 石上和敬 2013「浄土と穢土——〈悲華經〉概観——」桂紹隆他編『仏と浄土』シリーズ大乘仏教第5巻、春秋社、pp. 239-269。大田利生 2005『漢訳五本梵本藏訳無量寿經』永田文昌堂。平川彰 1969『初期大乘仏教の研究』春秋社。藤田宏達 2007『浄土三部經の研究』岩波書店。佐々木大悟 2003「〈無量寿經〉における「疑」について」『印度学仏教学研究』52 (1), pp. 212-214。Xiao, Yue. 2014. "Women in the Pure Land: The *Karunāpundarikā* and the *Dà āmítuó jīng*." 『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』30, pp. 39-101。Xiao, Yue. 2015. "The Doctrine of Wisdom in the Dharmākara Story of the *Dà āmítuó jīng*." 『佛教大学総合研究所紀要』22, pp. 15-30。Xiao, Yue. Forthcoming a. "Avalokiteśvara in the Earliest Version of the Larger *Sukhāvativyūha-sūtra*." 『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』32。Xiao, Yue. Forthcoming b. "On the Formation of Bodhisattva Thought in the Vows of the *Dà āmítuó jīng*." 『佛教大学総合研究所紀要』23。肖越 Forthcoming c. 「初期浄土經典中的“善”与“惡”——以人間觀為中心——」『人間浄土与弥陀浄土國際學術研討會論文集』香港中文大学人間仏教研究センター。

(平成27年度橋本循記念会中国伝統文化研究・調査助成金による研究成果の一部)

〈キーワード〉 蓮華化生, 国無女人, 作菩薩道, 『大阿弥陀經』, 〈悲華經〉

(佛教大学総合研究所特別研究員)